

アトモスフィア

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや

菊池 韶彦*

昨今、株価が暴落したとか、あまりに急激な円高とか、どちらかというとも将来に不安を感じさせるニュースの多いなかで、ノーベル賞授賞の話は、本当に明るく嬉しい出来事であった。今年のノーベル賞は誰にという予想屋たちの的がほとんどはずれていたために、がっかりさせられた人も多かっただろう。その後マスコミでは授賞者のプロフィールとか業績とかが記事になったが、何かとても重要な点が2つほど見過ごされているような気がする。

第1点は、物理学賞の益川・小林両氏がともに名古屋大学理学部の坂田昌一氏の研究室の出身であったということである。坂田先生は当時、湯川・朝永に続くノーベル賞の候補者として噂の高かった方であったばかりでなく、科学の研究に関しても積極的に指導をされており、平和と民主主義を旨とした教室運営に取り組まれていた方と記憶している。60歳にならずして故人となられたのは、本当に残念とも思えるが、そのもとで育った直弟子だからこそ、あの業績につながったのではないだろうか。また、化学賞の下村氏も、やはり名古屋大学理学部の平田義正先生の研究室に籍を置かれ、そこで海産生物の天然物有機化学への道を歩みはじめられたと聞いている。平田先生は、身近にある海産生物を材料とされ（特に食材となるものが多かったのは、かつて同僚であった江上不二夫先生の影響だろうか？）、自由な雰囲気のもとに数多くの独特な有機化学者を育てられハーバード大学、コロンビア大学の教授をはじめとし世界中で活躍された方も少なくない。いまはもう全く聞かれなくなったが、自由・平和・民主主義といった研究環境が実はとても大切だったのではないだろうか。

第2点は、坂田研究室も平田研究室も、当時の大研究室ではあったろうが、そのスタッフや大学院生が研究を行なうための資金が、潤沢とは言わないまでも、おそらく校費として、そこそこに配分されていたと思われることである。産学連携など御法度の時代であり、それでも研究者が、毎年のように膨大な科研費申請の書類を作るのに貴重な時間を割いていたとは聞いていない。現在のように若い人にながしかの研究費をつけて独立させ、成果を挙げよと叱咤するのではなく、たくさん同僚と議論し、切磋琢磨しながら育っていき、徒らに無為な競争を煽り、格差をつけるのではなく、それでいて長い目でみれば、高い評価に値する研究と、それを為しうる研究者が育てられてきたのであろう。

十数年後には何十人というノーベル賞を、という掛け声で、一部に研究費を投入しているようだが、周囲を見渡せば小粒な競争相手ばかりという環境でよいのだろうか。誰が仕組んだのかは知らないが、大学院重点化、大学法人化と矢継早の改組の嵐のあとで振り返れば今ノーベル賞に浴しているのは、実は、もう跡形をとどめないほど壊されてしまった古くさい体制の大学からでてきたものである。古いものが良い、自由きままで良い（昨今の経済破綻からもわかるように度を越した自由経済や小さな政府）といっているわけではない。あまりにも急激に変革をしてしまい、何か教育として大切なものが失われてしまったのではないだろうか。筆者は若い頃から好き勝手に研究をさせてもらい、幸いにも金儲けなど考えずに自由な基礎研究に打ち込んで来ることができた。なんだ、たいしたことなかったのではないかと思われれば、これが個人の精一杯の能力とあきらめるほかはない。

*元三菱化学学生命科学研究部主任研究員，元名古屋大学医学部病態制御研究施設医真菌研究部門教授